

黒田大明神原 II

第二次発掘調査報告書
付 正命庵跡発掘調査報告

1986.3

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

黒田大明神原 II

第二次発掘調査報告書
付 正命庵跡発掘調査報告

1986.3

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

大明神地籍は、かつては養蚕の最盛期には大桑園地帯であったが、42年頃第一次農業構造改善事業により、一斉に桃が植えられ、桃団地に姿を変え生産を上げて来ましたが、樹木の老化と、諸般の情勢の変化に対応するために、長期的展望に立つて考える時、農業経営を有利に進展させるには、道路網の整備と区画の整理を行うことが急務であり、併せて果樹品種の更新と集団化による諸作業の能率を上げ生産性の向上を図るべきであると、昭和56年秋、耕作関係者一同の賛成を得て、基本計画を作成して、昭和58年度から土地改良総合整備事業を実施することになりました。

この大明神地籍は、町内では最大の遺跡であり、飯沼諏訪神社とも大きな係りのある社宮司もあり多くの史跡を秘めた地籍であります。58年度は、遺跡から外れた地域の道路改良工事のため、教育委員会で立会いを願い工事を進めてまいりましたが、59年度は遺跡地域内に入って来ましたので、関係部分の発掘調査を実施していただきましたが、60年度に於ても、年度事業該当分の調査をお願いしました。工事に関係した部分調査のため、全貌はできないが、調査された遺跡からは当時の一端を伺うことが出来ますが、今後更に調査を進め総合考察の中で古代が偲ばれるのではないかと思います。

今回の調査は、調査団長、佐藤先生が担当されましたが、公私共に多忙な中で綿密な調査をしていただき、この報告書の刊行が出来ますことは、先生の御尽力の賜と深甚の感謝を申し上げ序文といたします。

昭和 61 年 3 月

上郷町長 山 田 隆 士

例 言

1. 本書は昭和60年度長野県下伊那郡上郷町黒田大明神原地籍農道改良工事に伴う第二次発掘調査報告書であり、町道25号線拡幅改良工事立合調査報告、正命庵跡発掘調査報告を記載するものである。
2. 本次調査は道路拡幅のため限られた範囲であり、一部調査となり不十分な調査に終わっているものが多く、このため資料提供に重点をおいて編集した。
3. 本書の編集執筆は佐藤、遺構実測図は佐藤・牧内が分担し、遺物の作図は佐藤、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
4. 遺構実測図のうちピット内、また横に記した数字は床面よりの深さを cm であらわし、遺物出土は床面からの高さを cm で示し、縮尺は図示してある。
5. 遺物は上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序	1
例 言	2
目 次	3
挿 図 目 次	3
I 環 境	4
1 自然的環境	4
2 歴史的環境	4
II 発掘調査経過	6
III 発掘調査結果	11
1 調査の概観	12
2 遺構・遺物	12
(1) 住居址	12
(2) 土 壙	13
(3) 堀 跡	14
(4) 旧 流 路	18
IV 町道25号線拡幅改良工事立合調査報告	19
ま と め	19
付 正命庵跡発掘調査報告	22
図 版	
調査組織	
おわりに	

挿 図 目 次

図 1 大明神原遺跡地形・位置図、及び周辺主要遺跡図	5
図 2 大明神原地形詳図、及び発掘区域、土偶出土位置	7
図 3 大明神原第Ⅱ次調査遺構分布図	9
図 4 大明神原Ⅱ-1号住居址	12
図 5 大明神原Ⅱ-1号住居址・土壙1号出土遺物	12
図 6 大明神原Ⅱ-2号住居址	13
図 7 大明神原Ⅱ-土壙1号	13
図 8 大明神原Ⅱ-3号住居址	13
図 9 大明神原Ⅱ-3号住居址出土遺物	14
図 10 大明神原社宮司、堀、北No.1	15
図 11 大明神原社宮司、堀、北No.2・3・4断面図	16
図 12 5号線、堀跡出土遺物	17
図 13 5号線、南トレンチ出土遺物	17
図 14 旧流路 S1～S5断面図	18
図 15 町道25号線 正命庵跡出土遺物	20
図 16 正命庵跡	22

I 環 境

1. 自然的環境

大明神原遺跡は長野県下伊那郡上郷町黒田北大明神原に所在する。上郷町は、長野県の南端を南北に並走する赤石山脈と木曾山脈の間にある飯田盆地のほぼ中央に位置する。この地域は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘と木曾山脈の山麓に発達した扇状地上に往古から人々の生活の跡がみられる。

大明神原は南に松川の支流の野底川、北に土曾川との間の山麓に発達した広大な扇状地の東端にあり、東西700m、南北100～150m、標高539～550mの舌状台地に遺跡は立地している。

遺跡の北東は、土曾川とその支流栃ケ洞川の深い浸蝕崖に切られ、谷を隔てて飯田市座光寺原となる。北から西には県道飯島-飯田線と中央自動車道が並走し、さらに西は上黒田の扇状地が広がり山麓に達している。南から東は緩い傾斜をもって下がり、洪積低段丘面となり、飯田市街地、上郷町中心街が広がり、比高差40m～50mの段丘崖をもって沖積段丘面となり天竜川に至っている。遺跡と天竜川との比高差は150～160mである。

微地形をみると台地中央部北東で土曾川に、その支流栃ケ洞川が合流している。その合流点から小さな支流の谷頭浸蝕が西に進みその浸蝕谷の終る地点から西に台地中央に凹地が長く延び、県道飯島-飯田線近くまで達している。昭和59年度の凹地部の道路拡張工事の立合調査と60年度の発掘調査によれば凹地帯は砂礫の堆積層で埋まり、栃ケ洞川の旧流路とみられる。また、台地の南西側には清水と呼ばれる小さな低地の水田帯があり、これを隔てて黒田人形で知られる黒田諏訪神社がある。

この旧流路とみる凹地帯に面する台地の両縁部はかねてより土器・石器が採集されており、台地南縁部では壁土採集の際、縄文中期後半の土偶1体と土器片・石器の多く、須恵器杯（平安期）等の出土をみている。耕作中、特に果樹園造成時の深耕中に炉址の発見された場所もあり、凹地帯に面する台地の両縁と南東端部を中心に遺跡が展開されているとみられる。（図1）

2. 歴史的環境

大明神原遺跡は古くは鳥居竜蔵博士の「下伊那の先史及び原始時代図版一大正13年」には遺跡としてのり図版に縄文・弥生時代の遺物が掲載されている。信濃考古総覧（昭和30年）には、縄文時代前期下島式・中期勝坂式・加曾利E式・後期堀之内式、弥生時代後期、古墳時代の遺物の出土が記載されており宅地造成時出土した縄文中期後半の土器・石器・土偶の好資料があり、注目されている遺跡である。

大明神原遺跡の所在する上郷町の遺跡を概観すると、昭和46年飯田高校考古学研究会により、町内全域の分布調査がなされ、さらに昭和57年度上郷町教育委員会による詳細な分布調査によって、一般遺跡69、古墳32基、城跡3の計104遺跡が確認されている。一般遺跡69ヶ所を時代別にみると縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42となっている。

縄文時代では野底川を逆上った谷間の姫宮遺跡で、草創期の表裏縄文土器片が発掘調査によって検出され柏原台地の山裾近くよりこの期とみられる石器が地主によって採集され保管されている。早期の遺跡は発掘

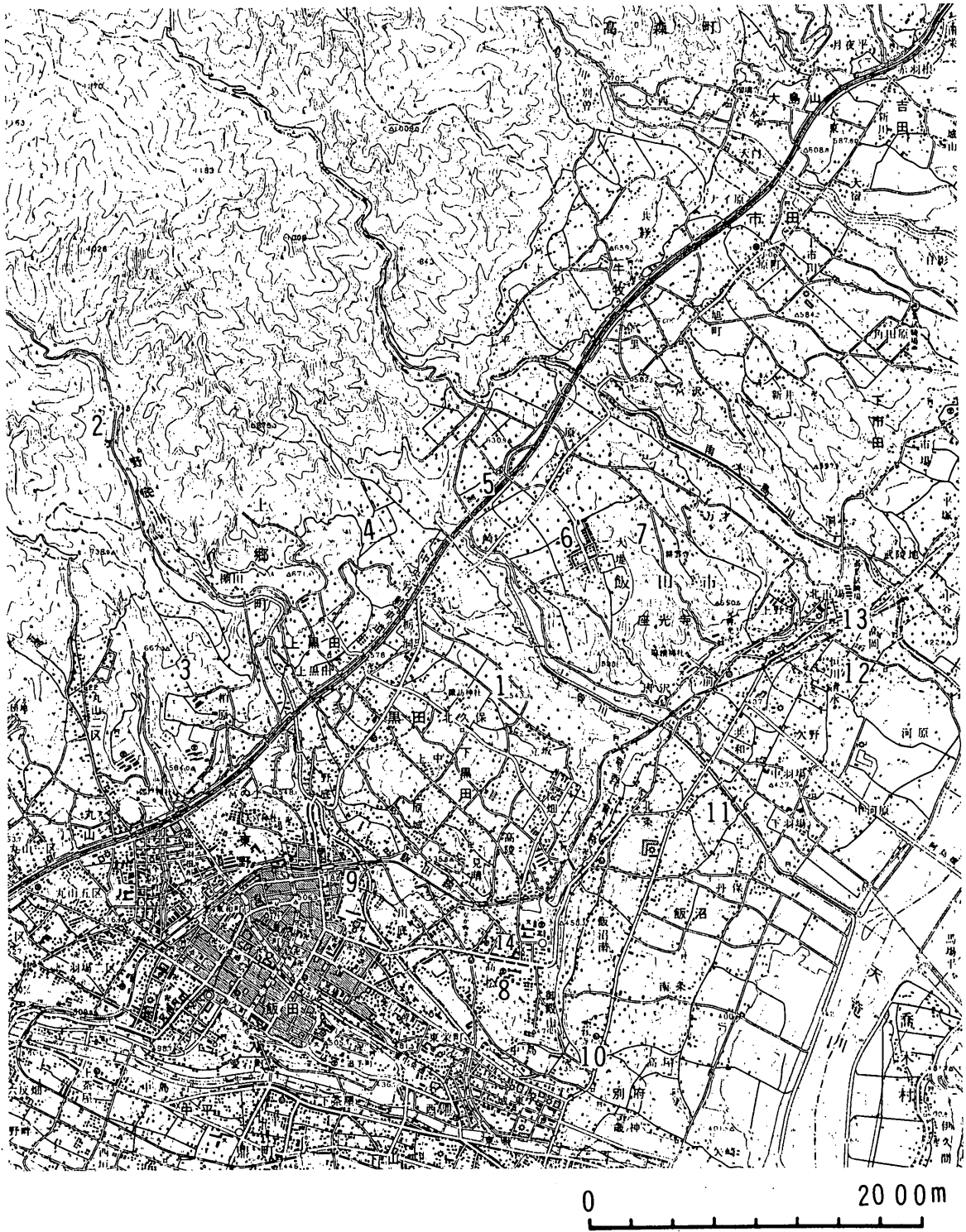


図1 大明神原遺跡地形・位置図及び周辺重要遺跡図

- 1. 大明神原 2. 姫宮 3. 柏原 4. 米ノ原 5. 宮崎A・B 6. 座光寺原 7. 中島 8. 高松原
- 9. 大門町 10. 雲彩寺古墳 11. 堂垣外 12. 恒川遺跡群 13. 高岡1号古墳 14. 正命庵跡

調査例はないが、比較的山寄りの扇状地に僅か採集され、前期になると遺跡数はやゝ増えてはいるが低位段丘面の飯沼・別府では未確認である。中期には南条最下位段丘面を除き全地域にみられている。これが後期には衰退を示し8遺跡、晩期には3遺跡と減少を示すのは飯田地方にみられる現象である。

弥生時代は前期は未発見であり、中期では堂垣外の発掘調査では阿島式、北原式の好資料の出土をみており、低位段丘に中期土器が多く表面採集している。後期になると全段丘面・扇状地に遺物の散布がみられ、山裾の柏原遺跡では座光寺原式の甕の完形品さえ出土している。

古墳時代では、古墳32基があり、後期古墳である。大半が別府台地端部に並び1部が黒田と飯沼に散在する。天神塚（雲彩寺古墳）は前方後円墳であり、県史蹟指定となっている。集落をみると14ヶ所があげられているが別府・飯沼の低位段丘面にあり、中期から後期にかけてのものである。高松原段丘面より上の台地には僅かに遺物の散布をみるにすぎない。

奈良・平安時代には全域に遺跡が広がり、堂垣外の周辺は座光寺恒川遺跡群との関連がみられる。

上郷町外の主要遺跡をみると、縄文時代では、野底川を隔てた大門町遺跡では中期中葉の好資料が発掘され、北の土曾川を隔てた宮崎A遺跡では、中央道遺跡発掘調査で早期押型文土器、宮崎B遺跡では中期後半Ⅱ期の好資料の出土をみている。座光寺原は弥生後期前半の座光寺原式、中島遺跡は弥生後期後半の中島式土器の標準遺跡であり、天竜川を隔てた低位段丘面にある阿島遺跡は弥生中期阿島式土器の標準遺跡である座光寺恒川遺跡は弥生中期後半恒川式土器の標準遺跡であり、国道153号座光寺バイパスに伴う発掘調査で弥生中・後期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代の貴重な資料の多くが出土し、また、遺構・遺物からみて郡衙址とみられる重要遺跡であることが確認された。これに隣接する高岡1号古墳は県指定の史蹟となっている。

中世における黒田地区については不明の点が多い。下伊那史第六巻に「宮崎氏は鎌倉時代北条氏滅亡後、信濃に來たり上黒田に居館を営みてこれに居住した。その居館の北は飯田市座光寺の地であるが、武田時代に宮崎八郎なるもの六千貫を領して松岡氏に属した。……」とある。松岡氏は武田氏の伊那侵入により、その配下となる。武田氏滅亡、信長の死後、伊那は徳川家康の支配地となり、旧領を安堵されるが、まもなく改易となり滅亡する。宮崎氏については明かでないが、おそらくこの時期に没落したものと思われる。

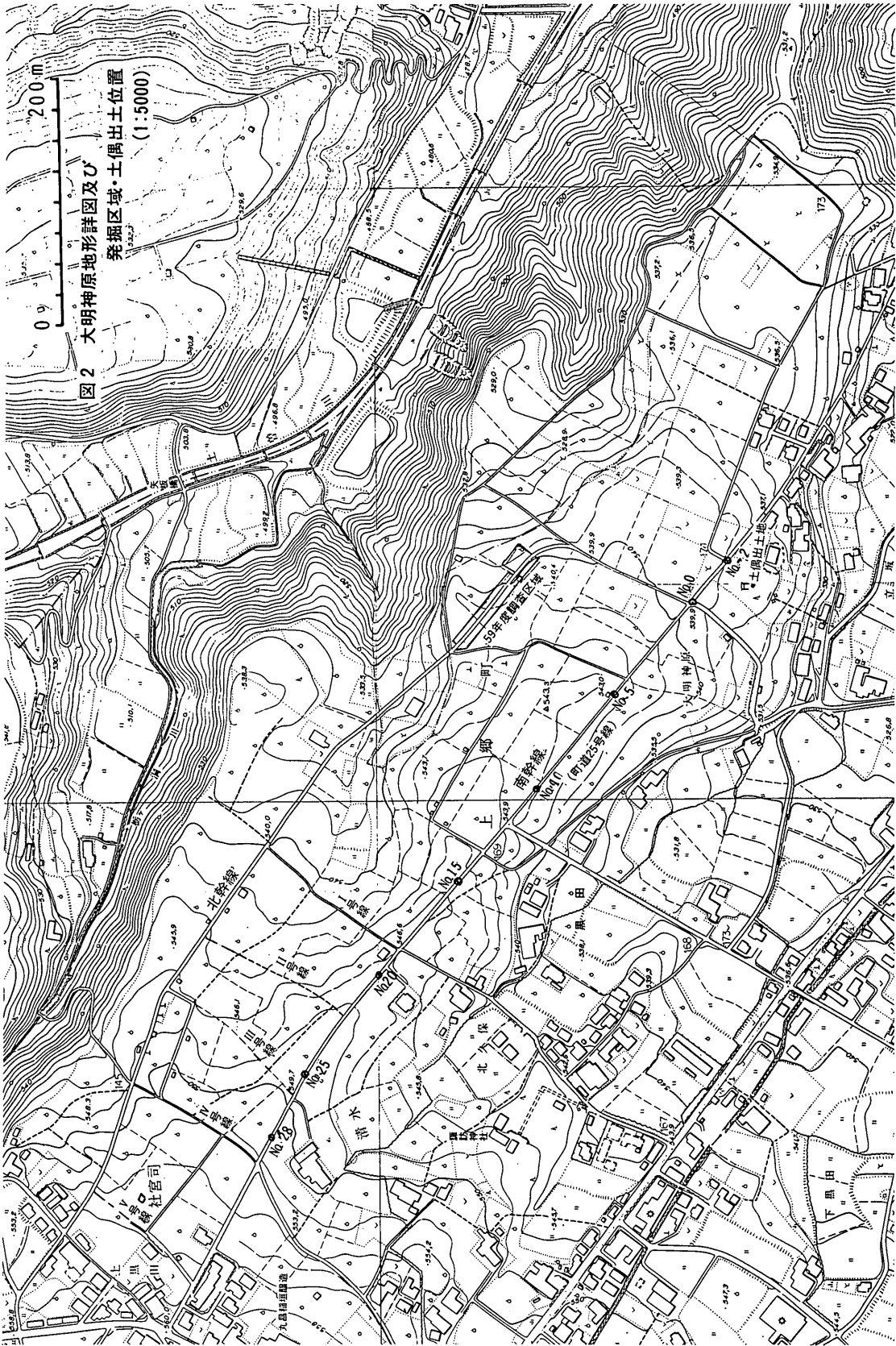
一方、諏訪上社史料によると寛正元年（長祿4年、—1460）座光寺貞近は黒田地頭として五月会賀頭を勤仕している。「長祿四年庚辰五月会 一賀頭黒田、座光寺入道、御符之札一貫八百文、頭役拾貫」とある。これによって上下黒田は座光寺氏の所管することが知られる。座光寺氏は座光寺上野に居館を構えたとされている。諏訪氏の一族であった座光寺氏によって黒田諏訪神社が祀られ、また発掘調査区域に隣接して飯沼郷社宮司がある。

Ⅱ 発掘調査経過

昭和60年度、上郷町は大明神原に農業構造改良事業の一環として59年度に引続き農道改修工事を実施することになった。59年度発掘調査によって縄文時代中期後半、弥生時代後期の住居址7軒が検出されており、以前から表採遺物が各時代にわたってみられ、注目されている遺跡である。このため工事に伴う発掘調査が上郷町教育委員会によって実施されたのが今次第Ⅱ次調査である。

道路改修計画は台地の約半分の西側の区域に東西に南側と北側を走る幹線道路を南北に結ぶ5本の農道の拡張である。西端の道路のみ新設箇所があるのと、現在耕作果樹の収穫に支障なく無舗装の農道1本以外

は調査幅0.5～2mと限定された範囲である。(図2)



発掘調査日誌

- 8月28日(はれ・あつい) 器材運搬・テント設営、道路拡張・新設箇所を東よりNo.1～5号線とする。
2号線にグリッド設定、調査にかかる。農道のため堅く苦勞する。
- 8月29日(はれ・あつい) グリッド調査、墓地より西側を調査、
1号住居址を検出、その北に2号住居址を検出。台地中央の凹地から北の傾斜地にグリッド設定する。
- 8月30日(はれ・あつい) 1号住調査、ほぼ掘り上げ。2号住調査、西側は用地外と墓地にかかり、東側の1部調査に終わる。住居址の形態からみて弥生後期とみるが、遺物の出土なし。北側の南傾斜面に3号住居址を検出する。
- 8月31日(はれ・くもり、にわか雨あり) 1号住完掘。1号住・2号住写真撮影、測量。3号住の調査。
凹地帯は砂礫層の堆積、遺構・遺物なし。
- 9月1日(前夜半から午前中大雨、午後はれ) 日曜日休み
- 9月2日(はれ・あつい) 3号住調査、完掘。1号線グリッド設定、遺構・遺物なし。3号線にグリッド設定、調査。
- 9月3日(はれ・あつい) 3号線調査終わる。遺構・遺物なし。4号線の調査、西側は調査範囲狭く、全面発掘するが、遺構・遺物なし。その西側にかつて耕作中、炉址があったというが、その跡は不明。3号住測量。写真撮影。1・2・3線全体測量。
- 9月4日(はれ・あつい) 4号線東側、グリッド設定調査、遺構・遺物なし、測量。5号線一社宮司地区にグリッド設定、調査。深い掘りこみとみる溝址ともみられ、1部断面調査する。このため明日重機により排土し調査することにする。
- 9月5日(はれ・あつい) 5号線、重機により幅1.5mを東西に3か所掘り、その後を手掘りで調査、深くて苦勞する。幅6m、深さ3mの堀跡となる。郷土史家日下部新一氏を依頼し、中世豪族について話し合う。中世陶片の出土をみる。
- 9月6日(はれ・あつい) 堀跡調査、北端部とみる、北側道路堺までを掘り調査する。弥生後期土器片多く、住居址の1部を検出、堀によって切られていることを確認する。堀跡調査トレンチを北より、N1・N2・N3とする。N2・N3の土層断面調査、写真撮影。
- 9月7日(はれ・昼より小雨) N1を掘り上げ、測量・写真撮影。
- 9月8日(はれ) 日曜日休み
- 9月9日(はれ) 堀の南端部調査にかかり、トレンチを3ヶ所に入れ、調査。覆土は比較的浅くなり、下部は礫層となる。
- 9月10日(はれ) 堀南部調査。トレンチS1・S2・S3を掘り上げ測量。S4の調査にかかる。S1～S3は堀とみるより、旧流路とみる。
- 9月11日(朝・作業時すぎより雨となる) 南部S4トレンチ調査・測量。午前で現場作業を終え、午後、図の整理。
- 9月12日(くもり・雨) 午前雨小降り、大雨となり午前で作業中止。S1～S4の埋戻し作業。
- 9月13日(はれ) S1～S4の埋戻し作業。N4の調査にかかる。堀の終りとみる痕跡あり、中世陶片の出土をみる。
- 9月14日(はれ) N4の堀調査、東に向うとみるコーナーを検出するが用地外となる。写真撮影・測量をし、現場調査を終了する。堀調査トレンチを重機により埋戻す。器材・テントを撤収する。



図3 大明神原第II次調査 遺構分布図

9月21日（はれ） 地形・地質の調査を地質学の松島信幸氏を依頼、調査し、台地中央部を東西に走る凹地の旧流路であることを確認し、 堀跡と旧流路とが地形的に区別された。

現場調査後、国道153号飯田バイパス路線の調査に追われ、ようやく、新年になって、報告書作成にとりかかったところである。

Ⅲ 発掘調査結果

昭和60年度第Ⅱ次大明神原発掘調査は、台地の約西半分の区域に東西に走る南と北の幹線道路を結ぶ5本の農道の拡張工事に伴うものである。いずれの道も、果樹の収穫期であり、秋野菜の播種、手入れ時期であり農道として使用されていたため、調査範囲には制約があった。また中央部を東西に走る凹地帯は旧流路を示すもので上層の黒色土層下は砂礫層となっている。

農道を東から1号・2号・3号・4号・5号線として調査した。（図3）

1. 調査の概観

I号線 舗装された道路で調査可能な長さ26m、幅2mの範囲であり、遺構・遺物は検出されなかった。

II号線 舗装はなく、長さ125mであるが中央部40m余は低地帯の凹地となっており、南側の斜面は道路のため全面の荒れは甚しく、また、北側の傾斜面は桑園抜根による深耕により荒らされていた。凹地帯3か所のグリッド調査では上層の黒色土が40cm前後あり、その下は砂礫層となっており、遺構・遺物の検出はない。

南側傾斜面では住居址2軒、土壇1基が、北側斜面では住居址1軒が発掘調査された。

III号線 舗装はなく、調査可能な長さ30m、幅2mにつき調査するが遺構・遺物なし。

IV号線 舗装された道路で、南側は道路拡張部が1段低位となり、作物があり調査不能。中央部西側に長さ36m、幅0.5～0.7mの拡張部と、東側18m、幅2mの可能範囲を調査。遺構・遺物は発見されなかった。道路西10m余の地点にかつて耕作中、石組の炉址が発見され、その炉石が畑境に置かれていた。また、東側30mの地点に耕作中に発見された炉址があり、その掘り出された石が近くに積まれている。これらの周辺は、かつて土器片・石器が多く表採された所といわれている。

V号線 遺跡の西端部近くにあり、東36mに飯沼郷社宮司が梨畑の中に祀られている。南50mは道路となっている。それより北60mは新設道路となる。新設道路予定地の南北にグリッド調査するが、いずれも深く落ちこみ、このため北端部は4.5～5m×6m、2か所に2×9mのトレンチ調査で中世の堀跡を検出し、北端部で東にカーブすることが予想された。

南側の道路東は拡張対象となり、そこに植えられていた柿の木は植替えられ、その掘穴が用地外にま

で残り、地主の許可で可能範囲にトレンチ6こを設け調査する。南より5トレンチは旧流路と確かめられ、北のトレンチは堀の南端となると推定された。堀北端部の掘りこみ部に僅かに住居址とみる痕跡があり、弥生後期土器片、打製石庖丁の出土をみている。

2. 遺構・遺物

(1) 住居址

Ⅱ-1号住居址(図4)

Ⅱ号線南より35m北の農道に発見され、上層部の荒れは甚しい。径3.2~3.5mの不整形な楕円形をなし、ローム層に30~40cm掘りこむ堅穴式住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、そのうち3こは壁に沿うか、壁に掘りこむものである。炉址は中心よりやや北に寄っており、地床炉であるが、北側には石の抜かれた痕跡がある。

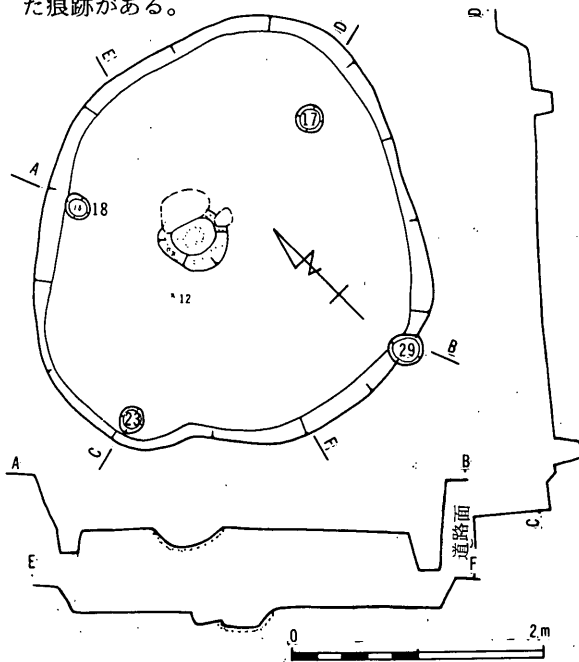


図4 大明神原Ⅱ 1号住居址

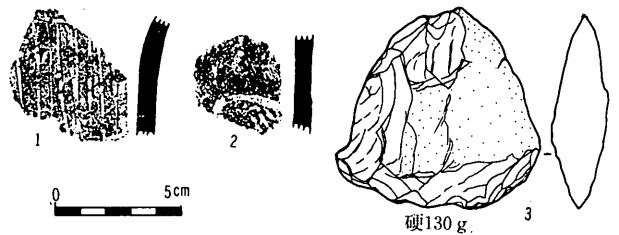


図5 大明神原Ⅱ 1号住居跡(1・2),
土壌Ⅱ 1号(3)出土遺物…(1:3)

遺物(図5の1・2)は少なく、図示したものは1・2の土器片であり、1は炉址縁部出土で、平出ⅢAである。2は覆土より出土し、縄文中期後半とみる。この他無文土器片と黒曜石片が数点ある。遺物の僅少さから住居址の時期ははっきりしないが縄文中期中葉かとも思われる。

Ⅱ-2号住居址(図6)

Ⅱ-1号住居址の北に隣接し、西側は用地外の畑と墓地にかかり、東側の1部分の調査に終わっている。1辺が3.2mの隅丸方形をなすとみられ、道路面のため上層は荒れておりはっきりしないが、ローム層に、10~15cm掘りこむ堅穴式住居址である。床面は堅いが、1部分の検出のため柱穴・炉址等は発見されず、遺物もなく、その時期は決めがたい。住居址の形態からみて弥生後期、または平安時代のものと予想される。

II-3号住居址 (図8)

II号線北幹線より16m南に入った所に発見され、上層は深耕によって荒れていた。

径4~4.5mの整った楕円形をなし、西側の1部は用地外の梨畑にかかる。ローム層に35~40cm掘りこむ堅穴式住居址である。床面は堅く支柱穴は4こ、炉址は中心よりやや南に寄っており地床炉である。

遺物(図9) 土器には縄文前期末から中期前半にわたるものがある。1は口縁端部に爪形文を、その下を横位の沈線をめぐらし、3は口縁部を横位の沈線をめぐらし、5は深い沈線による横位の羽状文を施す胴部であり、縄文前期末から中期初頭に位置づくとする。4は縄文の地文に竹管による円形刺突文が施され、前期後半にみるものである。2は口縁部に半截竹管による波状文を、7の胴下部は縦の沈線を施す平出ⅢAにみるもので、中期前半とみる。覆土出土の6の縄文の地文を深い沈線で切るもの、7の底部の施文等同時期とみるが不明である。上層よりは無文土器片が多くみられ、桑園の抜根時の混入とみられる。

石器には打石斧12・13・14があり凝灰岩製、重量は72・60・140g。15の石錘は硬砂岩製、重量75gである。11は有舌の石鏃、黒曜石製である。

(2) 土 墳

II-土墳1号(図7)

II号線南幹線より北25mの農道に発見され、南北117cm、東西径85cmの楕円形をなし、深さ15cmローム層に掘りこむ土墳である。上部は道路面となっているため、荒れており掘りこみの深さは十分に把握することはできなかった。

遺物(図5の3)は礫器1この出土であり、硬砂岩製、重量130gであり、縄文中期の土墳とみる。

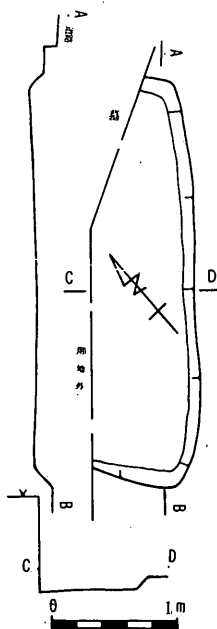


図6 大明神原II 2号住居址

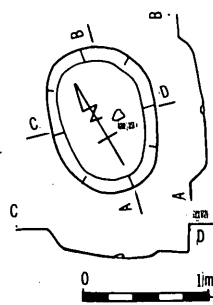
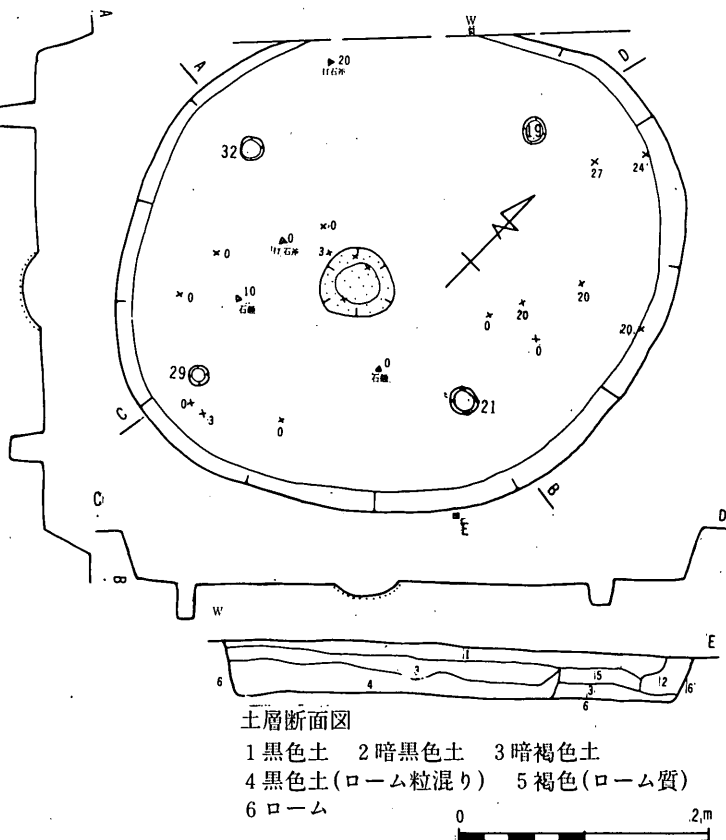


図7 大明神原II 土墳1号



土層断面図

- 1 黒色土 2 暗黒色土 3 暗褐色土
- 4 黒色土(ローム粒混り) 5 褐色(ローム質)
- 6 ローム

図8 大明神原II 3号住居址

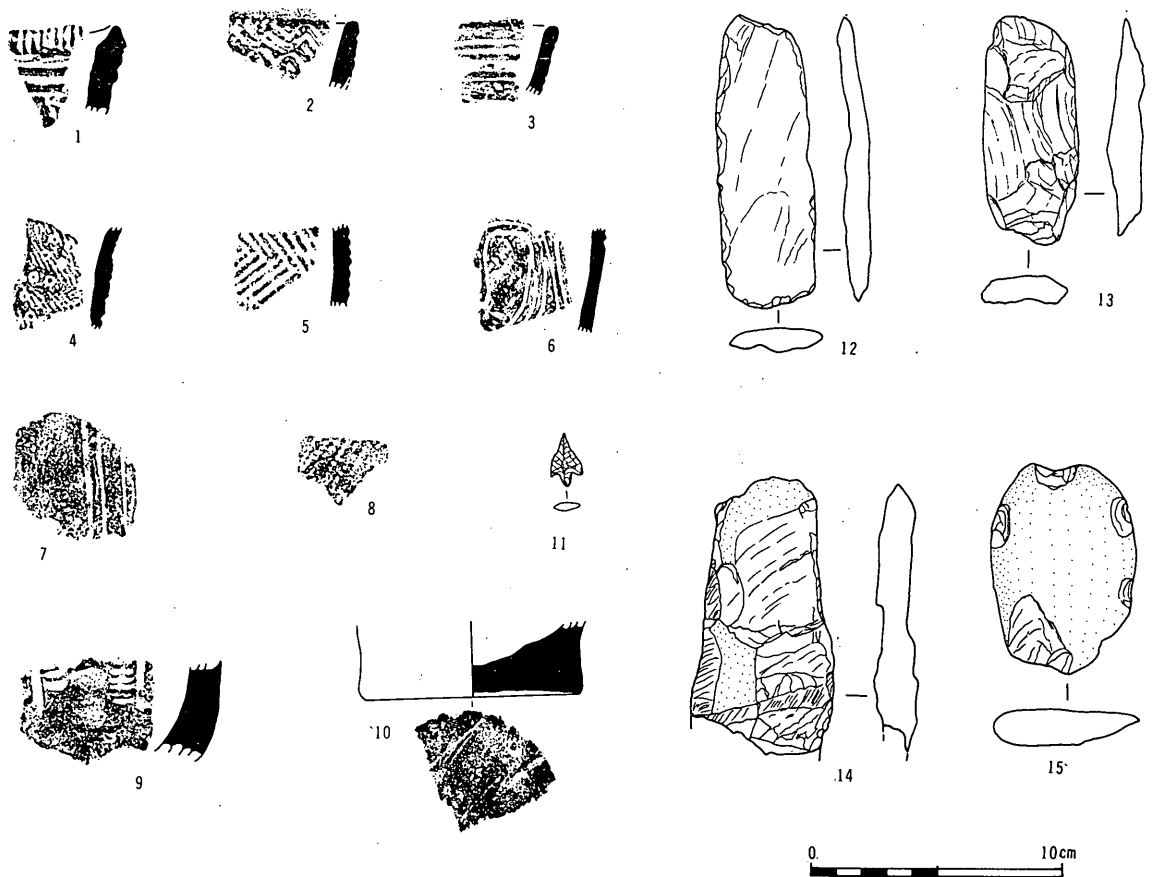


図9 大明神原Ⅱ 3号住居址出土遺物(1:3)

(3) 堀 跡 (図3・10・11)

V号線の北幹線道路から南67mのN4トレンチに至って掘りこまれている堀である。北側の新設道路予定の東側は果樹と野菜畑となっており、作物に支障の少ないN2・N3トレンチでは地主の許可で用地外に拡張調査し、堀の形態を知ることができた。北端のNトレンチでは北幹線道路近くで東にカーブすることが確かめられ、N4トレンチでは掘りこみが東に向うことが確かめられた。堀の一辺の長さは70m余と推測され、南北方向に直線に掘られている。

堀の幅は6m余、深さ2.6mローム層に掘りこまれており、底部幅はN2で3mと広く、覆土下層は粘質の灰褐色土となり、底部はローム層となる。N3の底部幅は1m、覆土下層は荒い礫混り砂土から黄砂土、底部はローム層となり、N1では下層は灰褐色土(粘質)があり、僅かに砂礫層があってローム層の底部となる。N4の東側は礫層となり旧流路の北端を示すものとみる。

遺物(図12)北端部に住居址とみる僅かな落ちこみがあり、(図10)その周辺、堀内部出土に1~8がある。土器は弥生後期を主として、1は壺の口縁部、4は埴胴部、5は上げ底となる甕の底部、6は壺底部である。2・3の高杯は古墳時代の土器とみられる。石器には7の打製石砲丁、硬砂岩製重量29g、8は敲打器で凝灰岩製重量360gである。

中世陶器片(図12の9~13) 9は平碗とみられ鉄釉、10は素焼のカワラケであり、11の小皿は鉄釉、12は花瓶とみられ灰釉が施されている。13は内面に灰釉が僅かにかかるが無釉、糸切底である。これらの他に小片数点と鉄鏝2点がある。16世紀初頭から前半に位置づくものであり、堀の時期を知るものと受けとめた。

N1 掘断面 (1:20)

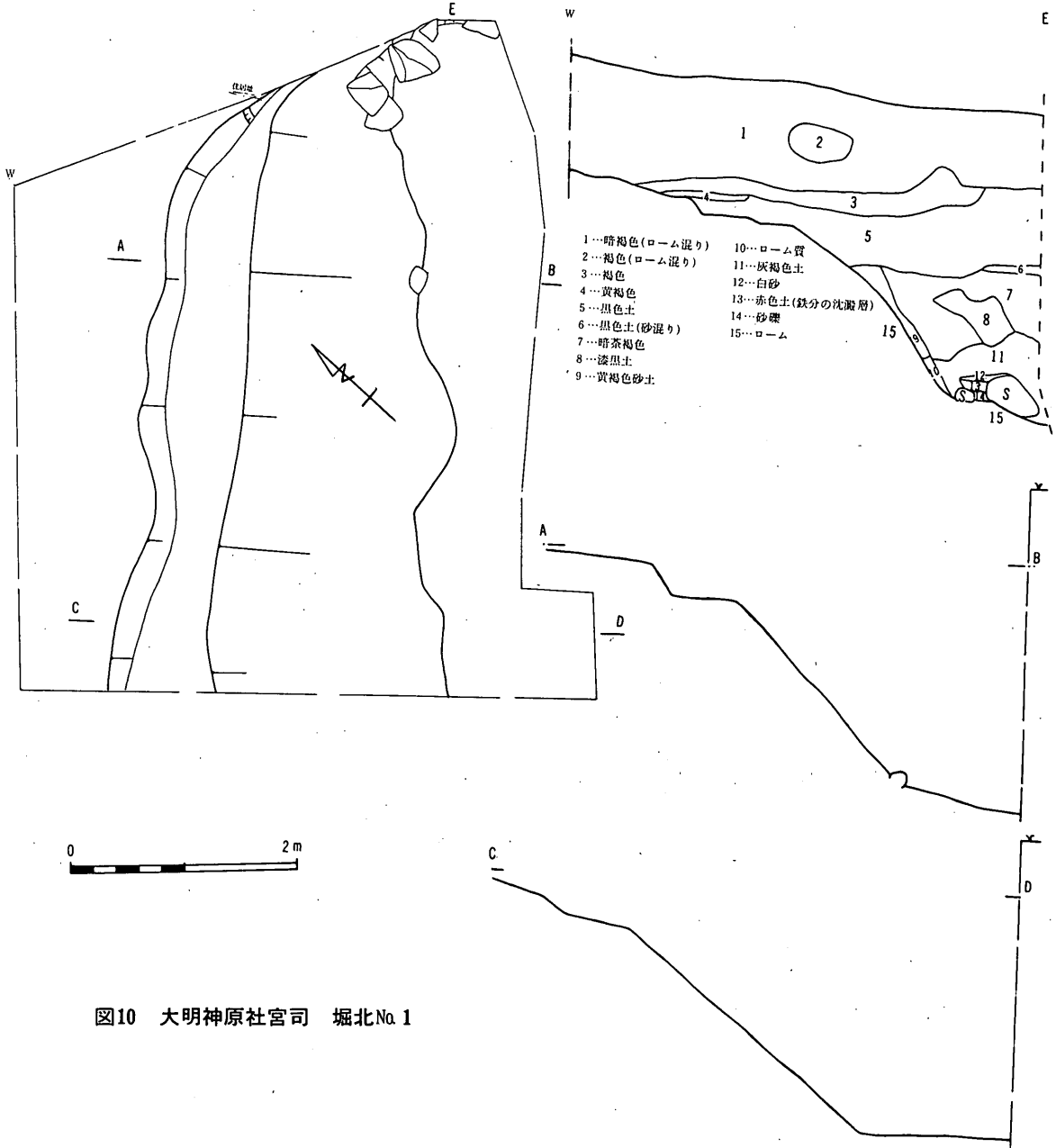
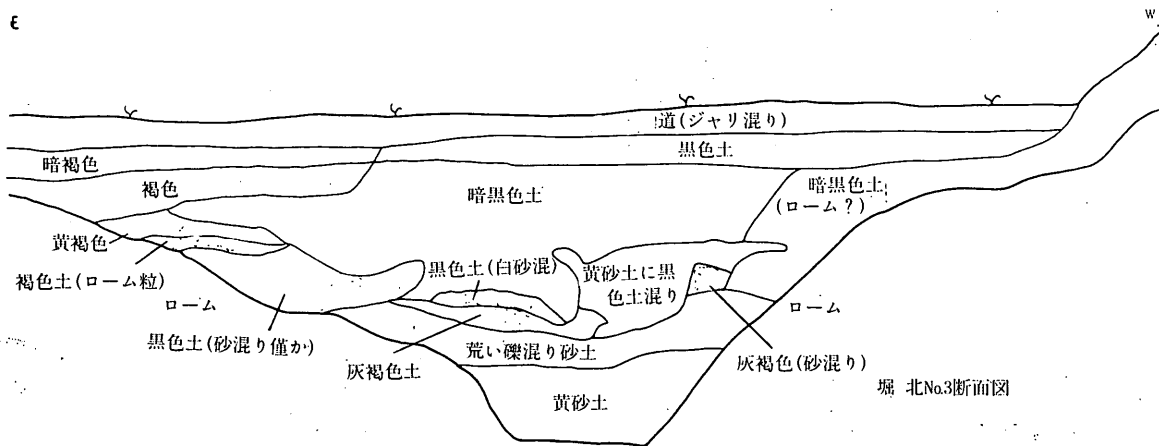
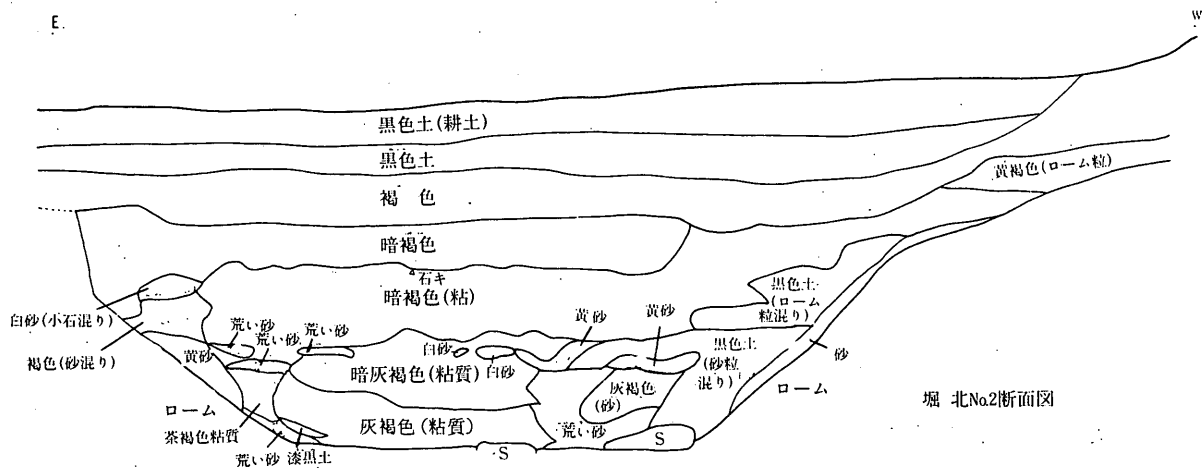


図10 大明神原社宮司 堀北No.1



- 1 黒色土
- 2 灰褐色
- 3 暗褐色
- 4 暗黒色土
- 5 黒色土(白砂混り)
- 6 褐色土
- 7 暗黒色土(ローム混り)
- 8 黒色土(ローム混り)
- 9 灰白色土(砂)
- 10 漆黒色土
- 11 漆黒色土(砂粒混り)
- 12 茶褐色砂質土
- 13 黄白色砂土
- 14 砂礫層
- 15 ローム(砂っぽい)
- 16 礫層

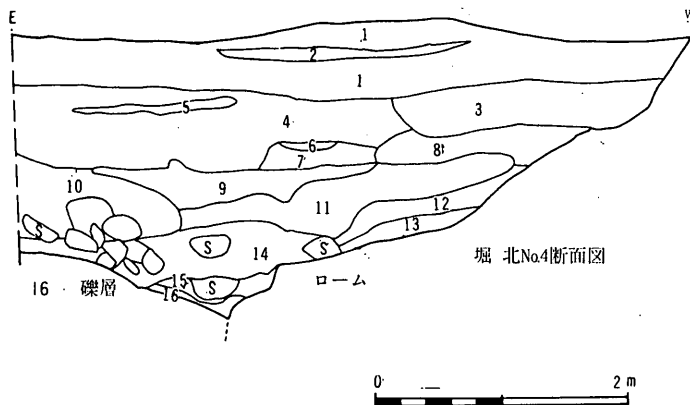
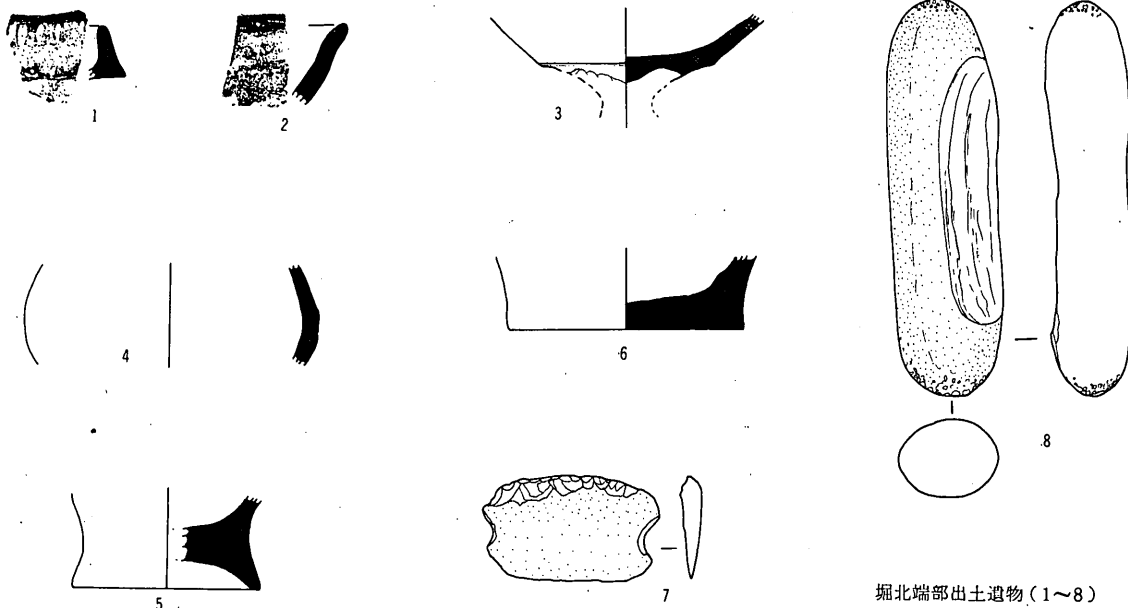
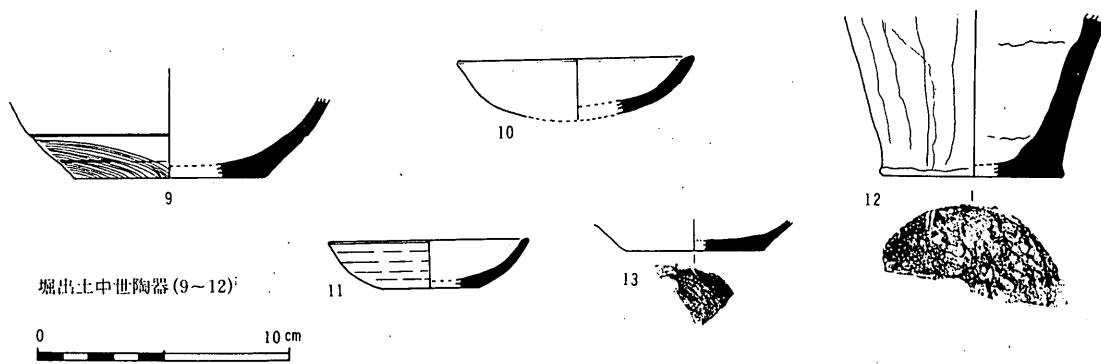


図11 大明神原社宮址堀北No.1 No.2, No.3, No.4 断面図



掘北端部出土遺物(1~8)



堀出土中世陶器(9~12)

図12 5号線掘跡出土遺物(1:3)

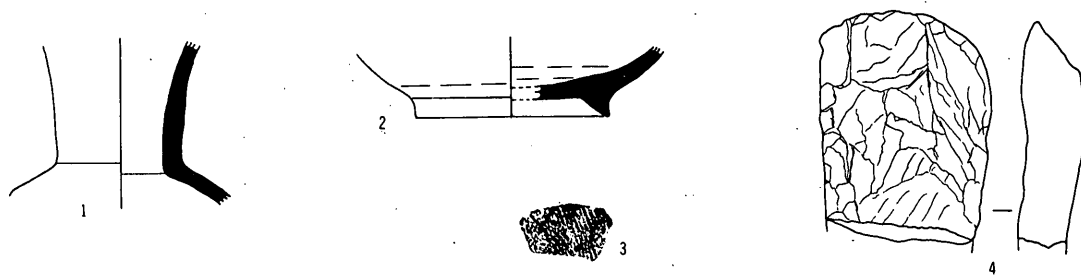


図13 5号線南トレンチ出土遺物

調査は西側のみで終わり、南と北で東に折れるを認めたが用地の関係でこれ以上の調査は不可能であった。おそらく70余m四方を囲む居館跡と予想されるが、その確証は得られなかった。

道路改修予定のIV号線から西は上黒田地域に入り、IV号線とV号線の間隔は80~95mあり、この中に飯沼郷社宮司が祀られている。下伊那史第六巻に「宮崎氏は鎌倉時代北条氏滅亡後、信濃に來り上黒田に居館を営みてこれに居住した、……」とある。宮崎氏の居館跡は不明である。堀跡をみにこられた上郷町史を編纂した日下部新一先生は宮崎氏の居館と考えられるといわれた。これについてはさらに東側の堀の存在の確認によって明らかにされるものである。宮崎氏がここに居館を営み戦国動乱期に入ってから15世紀後半より堀を拡張し、居館の備えをかためたものと思われる。

(4) 旧・流 路 (図3・図14)

V号線南側道路起点より北へ15m、28m、34m、38mにS1~S4トレンチを、S1とS2の中間より東4mにS5トレンチを調査その結果、S1~S4の下層は西に傾斜し、礫層をなし、S5では北に傾斜を示し礫層となっている。北45mのN4トレンチは堀の南端部となるが東側へ礫層が続いてきており旧流路と確認された。これらトレンチ出土遺物(図13)にN4の東側礫層より1~3があり、1は灰釉陶器の長頸瓶で流れこみによる磨滅が甚しい。2は灰釉の椀、3は国分式の土師片であり、いずれも流れこみとみられ、平安時代住居跡が周辺に存在したことが予想される。4はS4出土の打石斧、刃部を欠く、硬砂岩製、重量は225g。旧流路をみるとIV号線・V号線の間は平坦であるがIV号線の南側、道路起点より10~32m間は凹地帯となり東へ延びる。III号線南起点より30mから北へ凹地帯が広がり東へ向う。II号線では南50mより北へ広い凹地帯となり、I号線では南30mで一段急に下って凹地帯となり東へと続き栃ヶ洞川の合流地点近くの谷頭浸蝕谷へと延びている。II号線の凹地帯調査、59年度立合調査での上層の黒土層下は砂礫層となり旧流路であることが確認された。

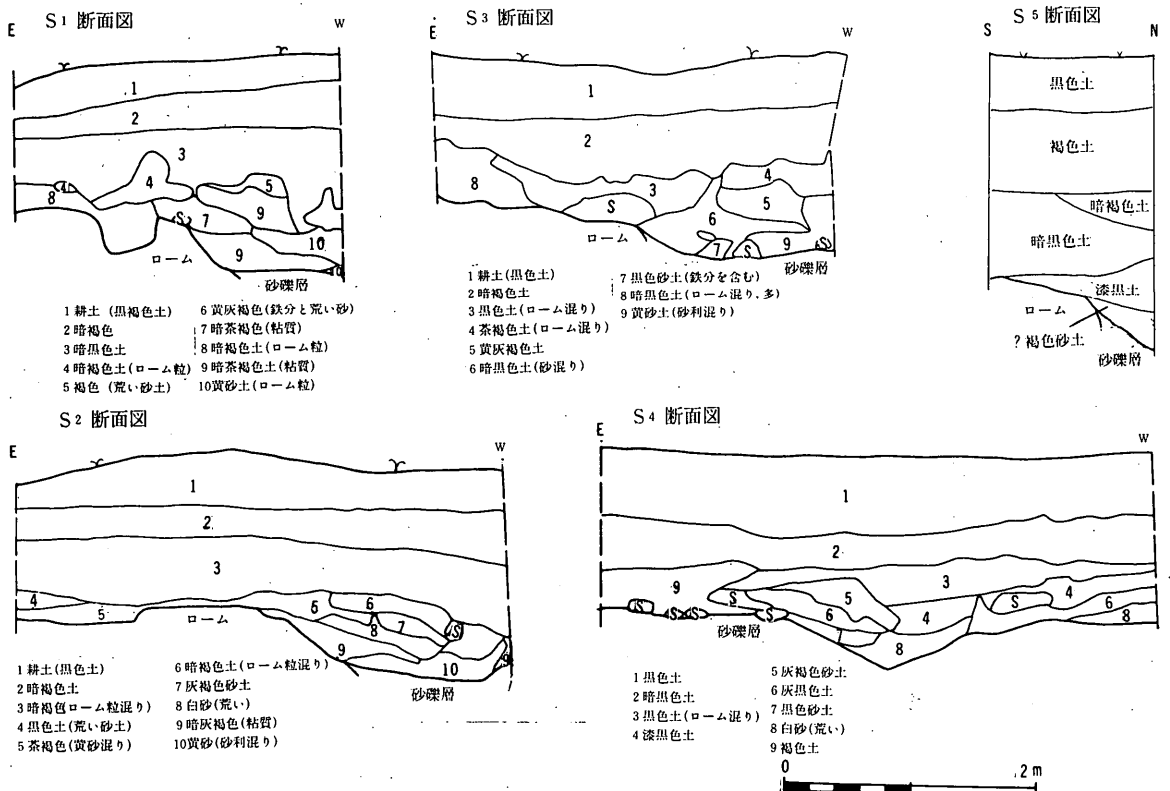


図14 旧流路S1~S5断面図

V 町道25号線拡幅改良工事立合調査報告

昭和59年度の計画外に町道25号線（大明神原南幹線）の拡幅改良工事が急きょ60年1月末から3月にかけて実施された。工事は現在の道路に側溝を付ける工事のためやむなく工事中の立合調査をすることにした。

（図2参照）

立合調査結果、遺構は検出されなかったが遺物は道路東よりNo.0-2からNo.15間の何か所から出土をみている。

特にNo.2からNo.0間に多く、この区間は上層を僅かに削ったのみで、61年度発掘調査区域となっている遺物（図15の1～6）土器には1の粘土紐の貼布による細隆起線文をもつ深鉢の口縁突起部であり、2は櫛形文をもつ深鉢胴部片であり、縄文中期中葉から後半への移行期のものである。石器の3は大形の横刃形石器、硬砂岩製・重量305g。4は石錘、硬砂岩製・重量75g。5の打石斧は凝灰岩製・重量130gである。6は近世初頭とみる仏飯器で糸切底、鉄釉が施されている。

No.0～15間遺物（15の7～17）7は浅鉢とみられ、口縁部に爪形文をめぐらし、縦と斜めの半截竹管文を施し、胴部は無文となり、縄文中期前半とみる。8は無文の胴部片で肌は荒れている。9は櫛形文、10・11は細隆起文をもち、ともに縄文中期中葉から後半期の移行を示す時期のものである。

石器には12～16の打石斧と17の石錘がある。12の打石斧は長さ16.4cm、幅4.1cm重量200gの整った形状をなし、刃部に使痕をもつ。14・16は刃部を欠き、硬砂岩製、他は凝灰岩製である。

遺構は発見されなかったが、側溝工事の南側に遺物の多くは発見されており、特に台地南端部にいくに従って多くなり、61年度計画予定となる台地南端部農業構造改良事業に対して十分な発掘調査が要望される。

ま と め

大明神原遺跡の立地は北を流れる土曾川とその支流栃ヶ洞川の合流点から南西に小さな支流の谷頭浸蝕が進み、この終わる地点から台地の中央部を凹地帯が西に長く延び、遺跡の西端部近くまで達している。昭和59年度と今次調査によって、そこは旧流路であることが確かめられた。また、遺跡の西端部近くの南側に清水と呼ばれるところがあり、小さな凹地帯があり、湧水をもち、水田となっている。

これら凹地帯に面する台地縁部に遺構は発見され、台地南縁部ではかつて宅地造成時に縄文中期後半の住居跡とみるが掘り出され、土器片の多くと土偶1個体の出土をみえており、59年度末に行われた町道25号線拡幅改良工事の立合調査でもこの付近から遺物が多くみられている。これらからみて遺跡は大明神原台地縁部に沿って展開されているものとみられる。

今次調査はI号～V号線の道路拡幅改良工事が大半であり、拡幅部の調査で幅0.7～2mの限定された範囲であり、作物の関係で調査不能の所もあった。

II号線は未舗装であり、調査時農道の使用されていない部分については調査可能で住居址3軒と土壇1基が調査された。しかし、桑の抜根による深耕と道路面で削られ、荒れており完全に遺構を知るには不十分であ

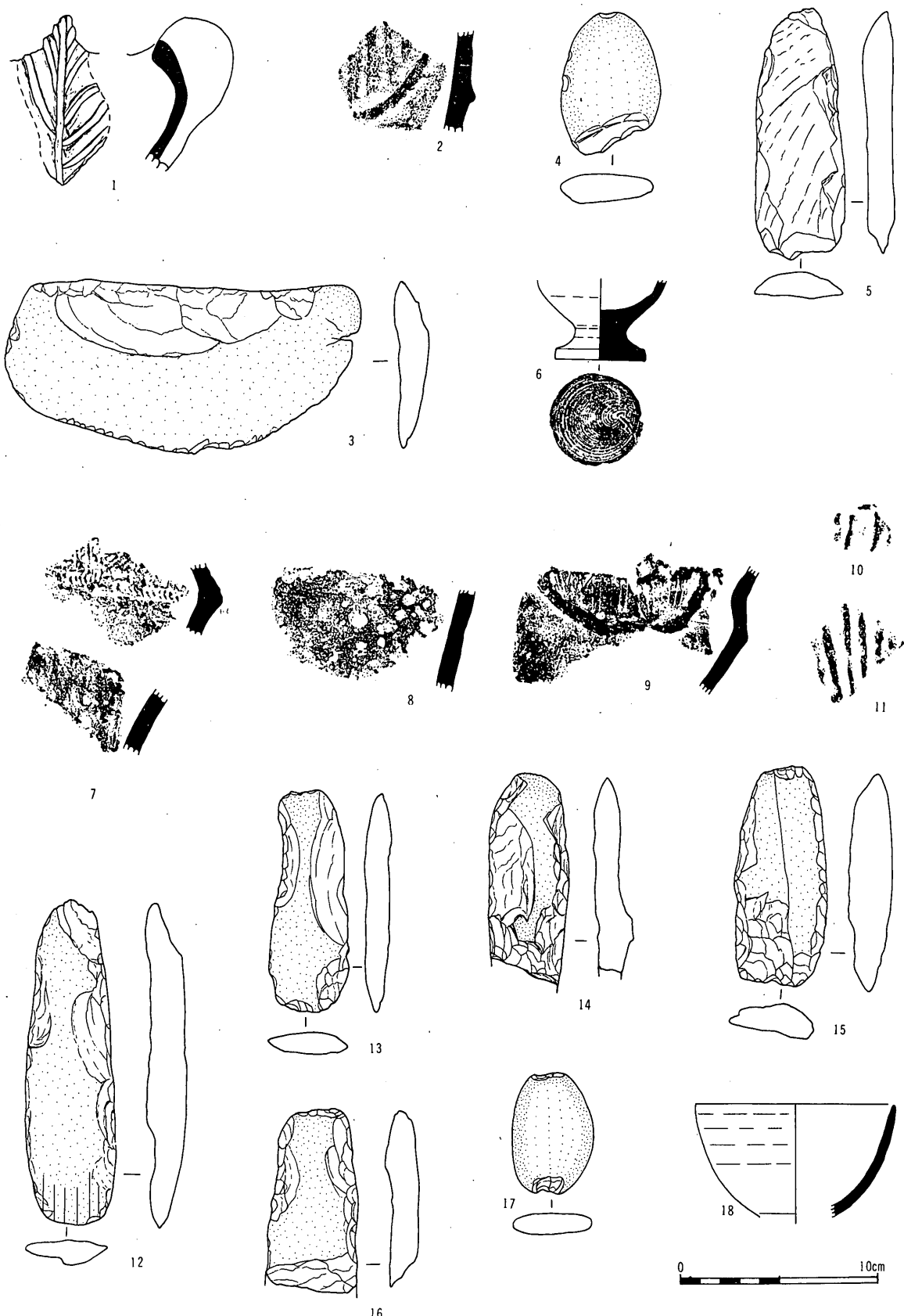
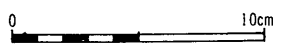


図15 町道25号線 大明神原南幹線立合調査出土遺物、正命庵跡出土遺物(1:3)
 (1~6...No.0E, No.04 7~17...No.0~No.14 18...正命庵跡)



った。2軒の住居址はほぼ全面の調査ができ、縄文前期末から中期中葉の遺物の出土をみた。1軒は大半が用地外であり、隅丸方形となる住居址とみられたが遺物はなく、その時期を知ることはできなかった。

I号・Ⅲ号・Ⅳ号線では遺構・遺物の検出はなかった。Ⅳ号線の周辺ではかつて耕作中に掘り出された炉址が2か所にあり、また、この付近は表採遺物が多かった所といわれている。

V号線の北側は新設道路となるが果樹園、野菜畑の関係で部分的調査に終わっている。南側の道路拡幅部調査では旧流路が発見された。北側では幅6m、深さ2.6mの堀が検出された。用地の関係で西側のみであり長さ70m余とみられ、東に折れていることが確かめられたが他は用地外の果樹園・野菜畑のため調査不能であって全貌を知ることはできなかった。下伊那史第六巻によると宮崎氏は北条氏滅亡後上黒田に居館を営み居住するとある。

Ⅳ号線から西は上黒田となり、地形的にみて一段高かまり、大明神原一带から竜東地区を眺められる展望のきく場所である。宮崎氏の居館址ははっきりしていないが、日下部新一先生はここに居館を構えたとすれば宮崎氏以外にはないといわれている。戦国動乱期に入って堀を拡張して備えを固めたものと思われる。堀よりの中世遺物は16世紀の陶器片である。堀の北端部に住居址とみる落ちこみが僅かに残り、この周辺、堀の中より弥生後期の遺物の出土をみ、西側の畑よりもこの期の遺物が表採されており、弥生後期の遺構の存在が予想された。また、古墳時代とみる土師片もあり、注意すべき地域とみられる。

南側の旧流路とみる砂礫層に平安時代の灰釉陶器の長頸瓶・椀・土師器の国分式の小片があり、平安時代の遺構の存在が予想された。

町道25号線の拡幅工事は急ぎよ昭和60年1月末から3月にかけて行われ、やむなく工事中の立合調査を実施した。その結果南東Na-2からNa28の600m間の調査であるが遺構とみるものは発見されなかったが、遺物の出土をみている。

遺物の出土をみたのはNa15より南340mの間であり、特にNa0から南Na-2の40mに多くみられている。遺物はすべて上層部出土であり、土器の多くは縄文中期中葉から後半の移行期とみるものであり、石器もこの期のものとみられる。Na0～Na-2は61年度工事計画に接しており、かつての土偶出土地点の近くにあり、61年度第Ⅲ次調査に万全を期すべきが要望される。

おわりに、本次調査にあたって地主の方々の御理解・御協力があり、残暑きびしい折、作業にあたられた方々の御骨折りが大きな力となったことを深謝したい。

(佐藤 甞 信)

付 正命庵発掘調査報告

正命庵跡は上郷小学校の南西約60m、町立上郷図書館の北に隣接する所といい伝えられており、その東に接し庵主の墓碑がある。

正命庵についての記録(注1)をみると、鎌倉時代後半に開基され善勝寺と唱え、後に飯田へ移転し、そのあとに薬師堂を残し正命庵と号すとある。庵主墓碑で判明する庵主の一番古いのは正獄真海、正徳5年(1715)7月寂である。

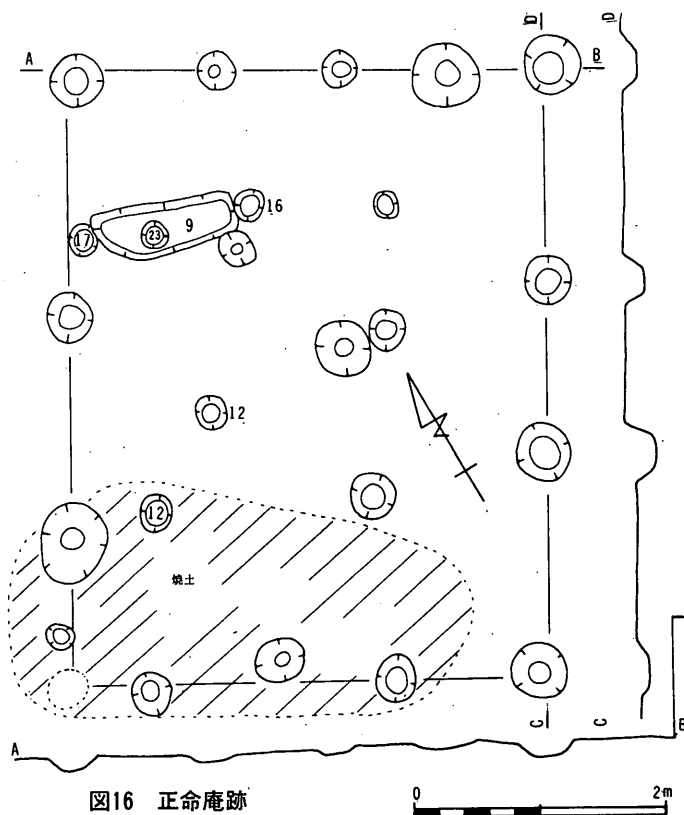
天明3年(1783)焼失、同6年御堂再建とあるが、再建場所は正命庵跡より西約200mにあり、高松薬師堂となっている。

正命庵で特記すべきは「元禄年間正命庵の正獄貞海が近隣の者を集め人形浄瑠璃を稽古(日下部新一「黒田人形」昭44)とあり、現在黒田人形で知られる黒田人形発祥の地である。

正命庵跡は高松原遺跡の北端部にある。昭和59年6月、その南に隣接する図書館建設工事の際、用地内を試掘するが表土の黒土層下は旧流路とみる砂礫層となり、遺構・遺物は発見されなかった。

昭和60年度秋、図書館に接した西側に県道市場桜町線と上郷小学校前の町道を結ぶ道路改修工事が行われることになった。

地主代田茂雄氏によれば道路用地から東の用地外が正命庵跡であり、耕作時に火災あととみる炭がでいるとのことである。このため9月14日大明神原Ⅱ次調査と平行して調査を実施した。用地内は図書館建設時



の器材運搬道路となり堅く重機により表土を排除し、さらに地主の許可で用地外東側に拡張し、60㎡を発掘調査する。

調査結果、表土1m前後の深さに約20㎡に木炭と焼土がみられ、南西側は特に顕著であった。床面とみるは荒れており遺構は完全に把握できなかった。南北4.8×東西3.8mに土台石を置いた建物址とみられるが石はずされ僅かにその痕跡を残すのみで、その配置は整っていない。火災後の整理によって崩されたと思われる。(図16)

遺物(図15の18・図版Ⅳ)は少なく、床面出土である。陶器のほとんどは江戸時代のものであり、図15の18の茶碗は口径10.2cm、高台を欠く、淡緑の灰釉の優品である。これ以外の陶片は小さく器形のわかるものは僅かである。これの中で1点のみ表面に素焼、内面に灰釉が僅かに付くものがあり、(図版Ⅳ)中世

後半ともみられる。銅器（図版 IV）2点の出土をみ、仏具の飾と思われる。

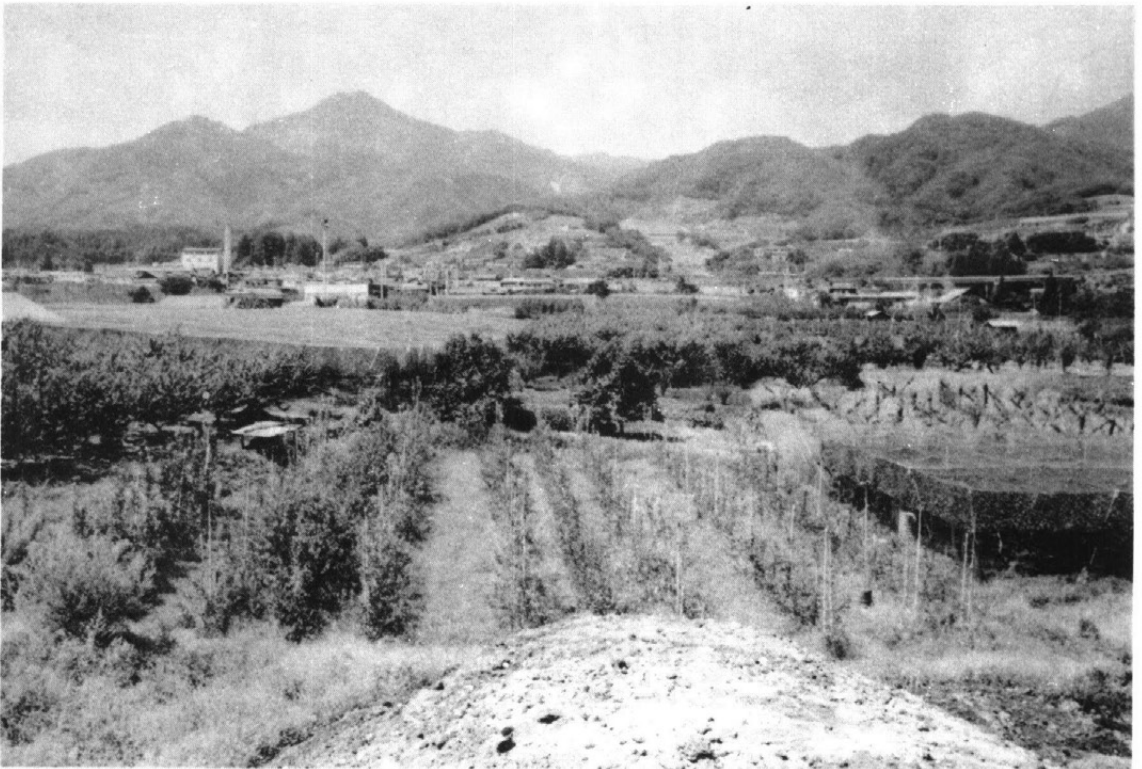
全面にみられた焼土と木炭は火災跡を示すものであり、遺構は不十分であったが土台石を置いた建物址とみられ、堂址と推定される。遺物は少いが、江戸時代の陶片と銅器があり、東側に隣接する庵主墓碑からみて正命庵跡であることに誤りないとみたい。

注 I 上郷史編纂委員会「上郷史…第一章・第二編・九、高松薬師寺」昭53

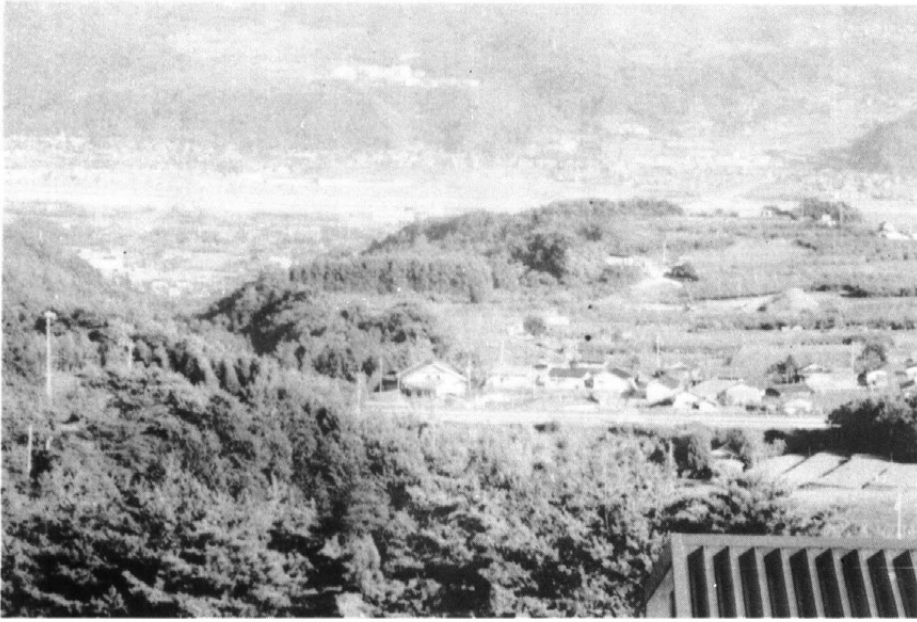
図版 I 遺 跡



大明神原遺跡全景 西より見る



遺跡中央部東から本次調査区域をみる



遺跡の北側—左下の谷 柄ヶ洞川, 上中央の谷 谷頭浸蝕谷で
これより台地中央部に凹地帯が続く



遺跡中央部と天竜川東岸



遺跡から天竜川東岸をみる

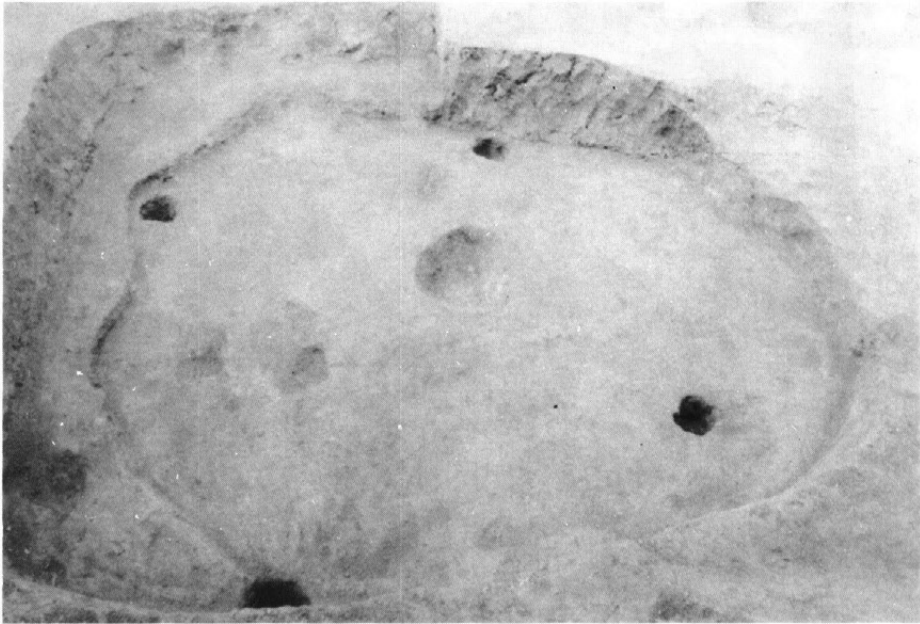
図版II 各調査区と遺構・遺物



II調査区—南から



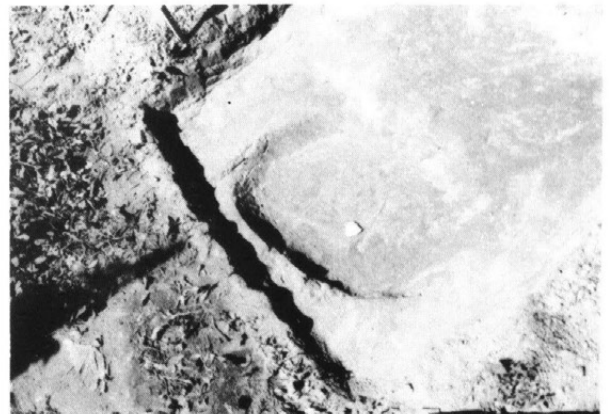
II調査区—北から



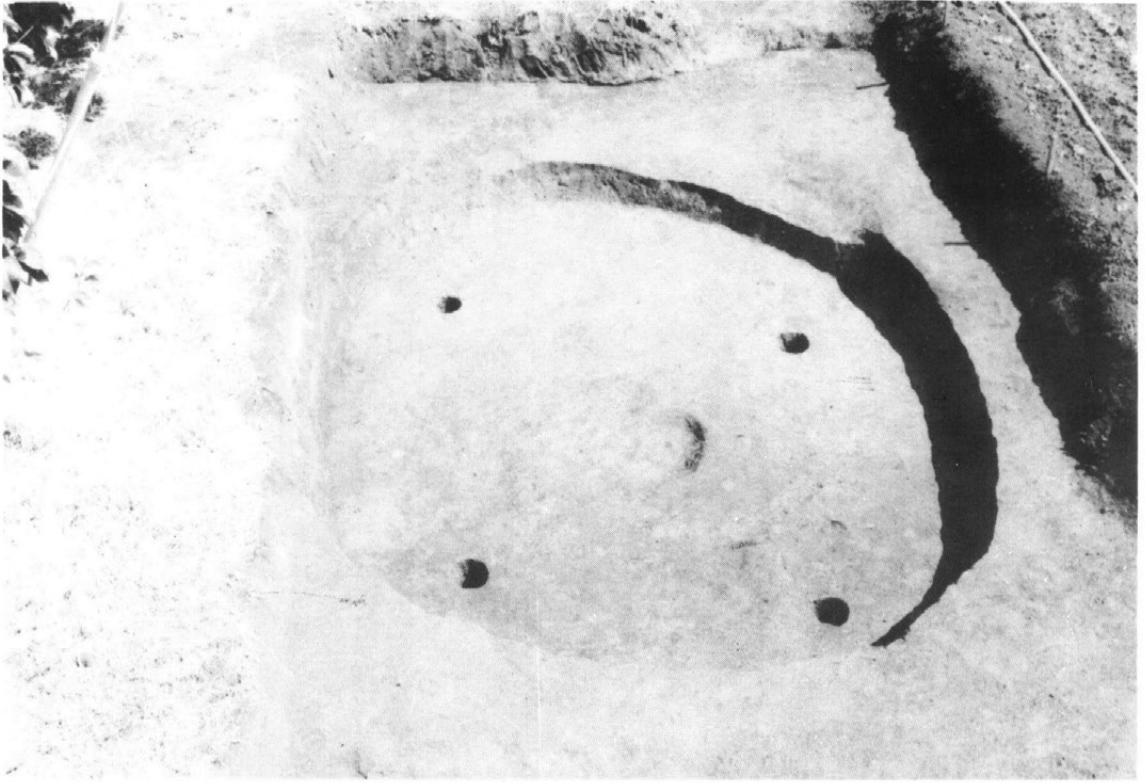
II-1号住居址



II-1号住居址・2号住居址—上が2号住，1部調査



II-土坑1号



II-3号住居址



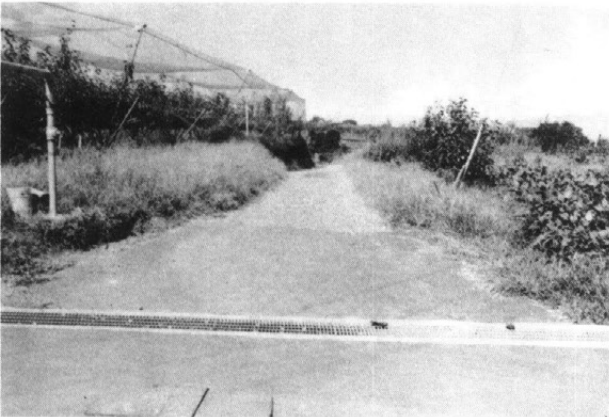
II-3号住居址出土遺物



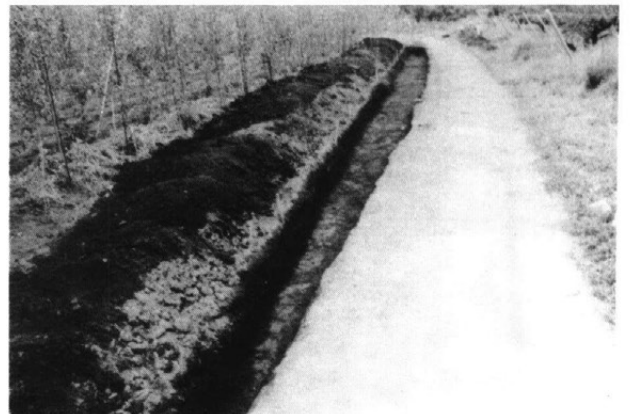
I 調査区……遺構なし



III 調査区……遺構なし



IV 調査区



IV 調査区—西側トレンチ……遺構なし



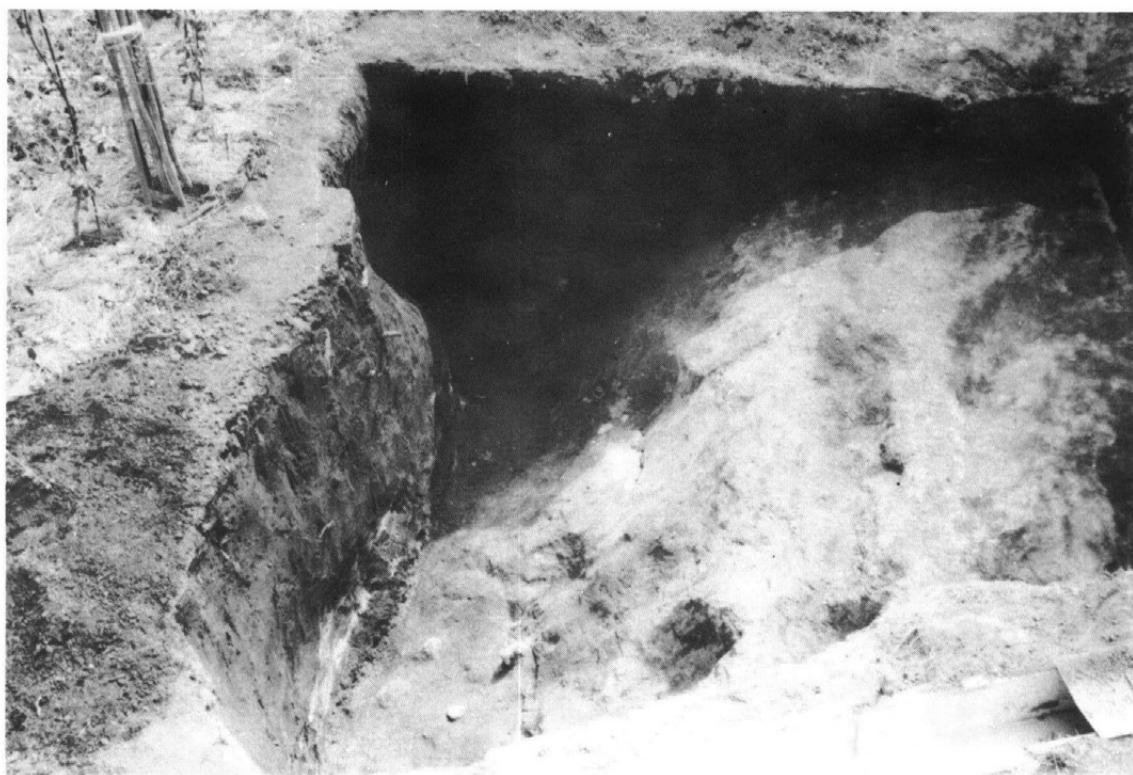
V 調査区



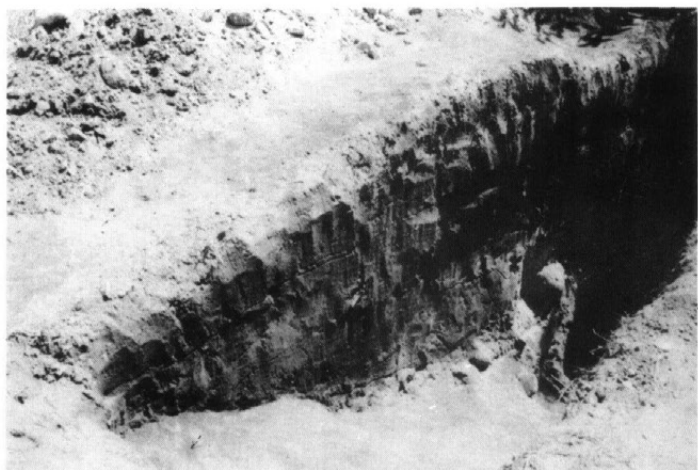
V 調査区東側梨畑の中の社宮司



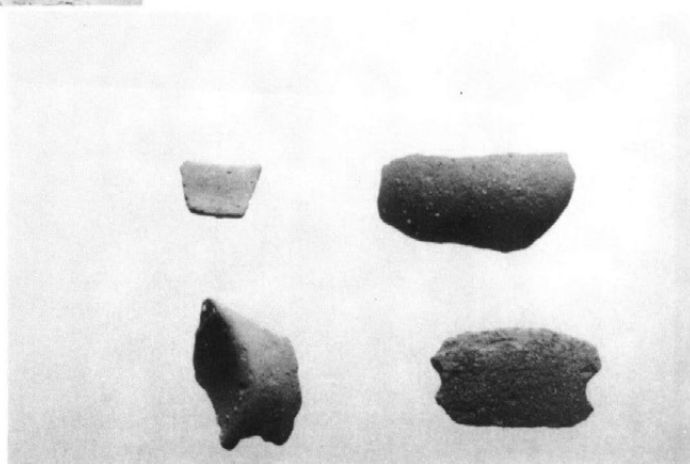
V調査区（社宮地）西側の堀（N2トレンチ）



V調査区（社宮地）北端の堀（N1トレンチ）



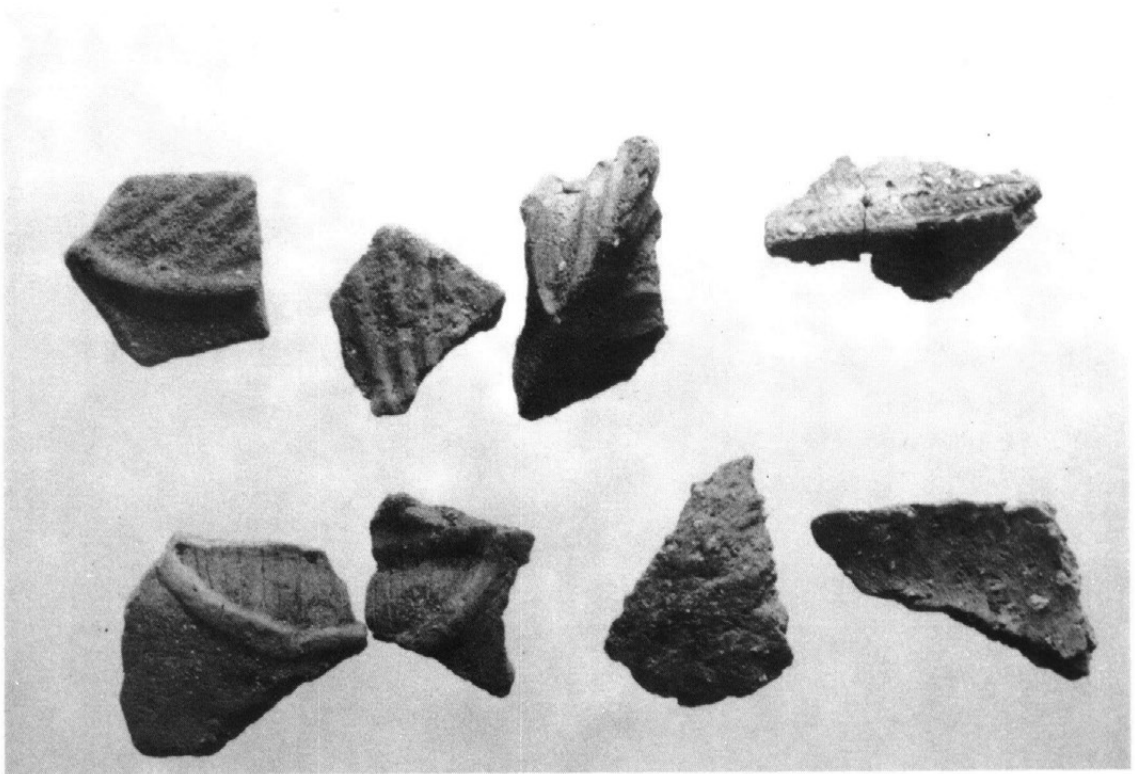
V調査区（社宮地）南端部の堀（N4トレンチ）
旧流路の礫層がみられる



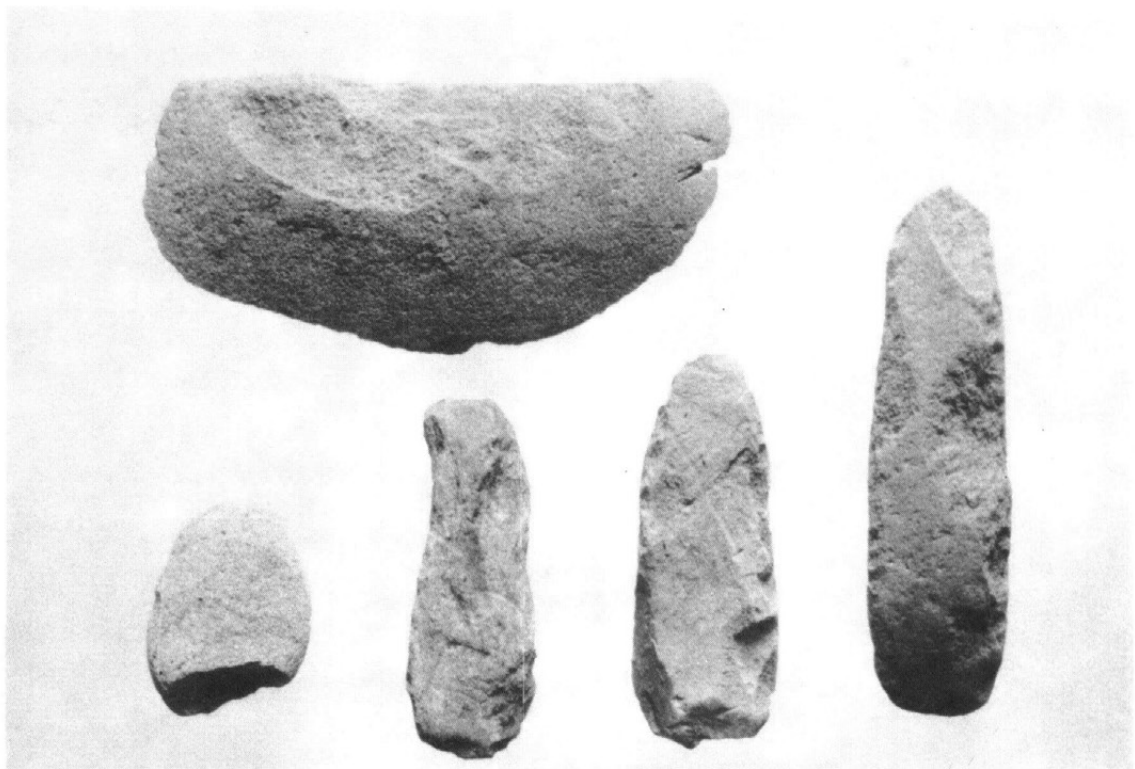
堀内出土の弥生後期の遺物



堀内出土中世陶器片



町道25号拡幅工事立合調査による検出土器



町道25号拡幅工事立合調査による検出石器

図版Ⅲ 発掘調査スナップ



Ⅱ-Ⅰ号住居址の調査



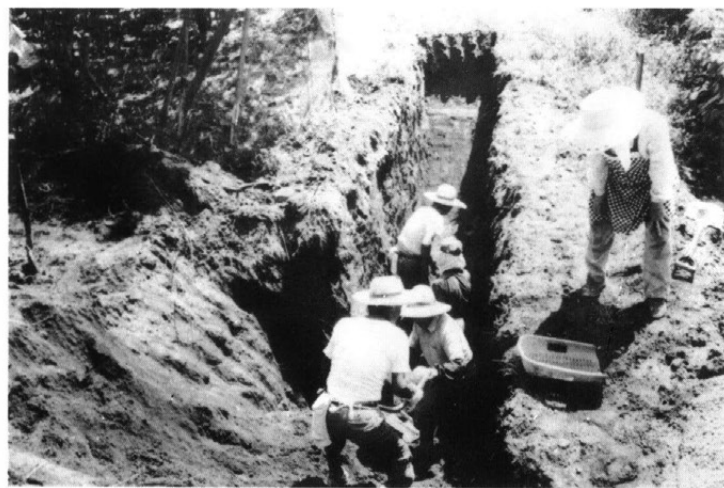
Ⅲ調査区の調査



Ⅳ調査区の調査



堀の調査

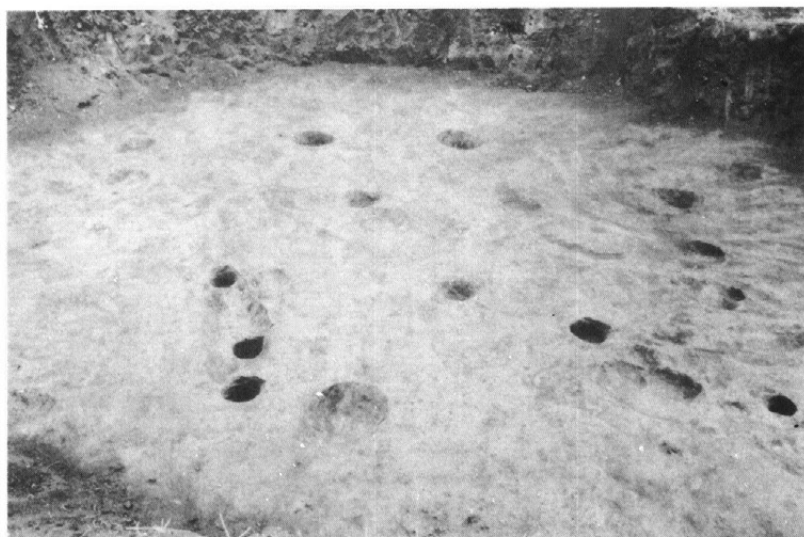


堀の調査

図版Ⅳ 正命庵跡



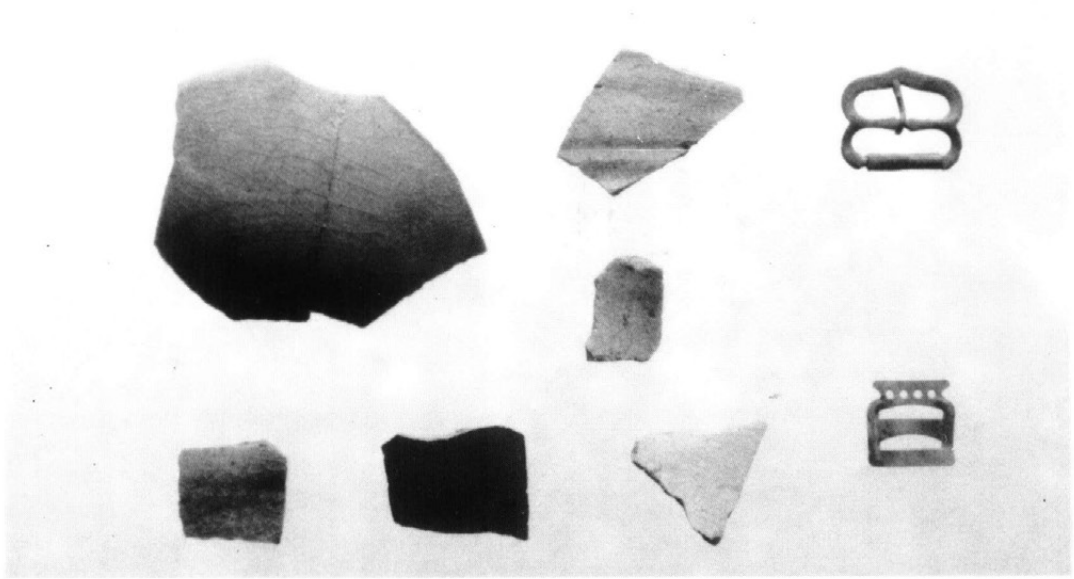
正命庵跡—南より



正命庵跡—西より



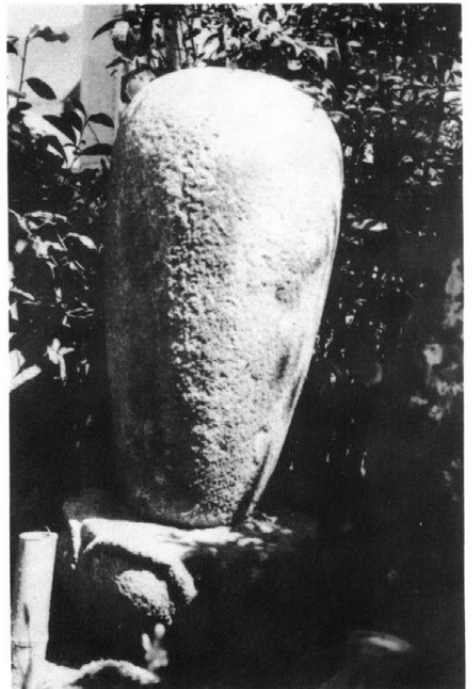
正命庵跡—北より



正命庵跡出土近世遺物



正命庵跡発掘調査スナップ



黒田人形の始祖といわれる正嶽真海の墓

調 査 組 織

1. 大明神原遺跡調査委員会

北 原 忠 夫	上郷町教育委員会委員長
吉 川 昭 文	同 上 教育長
小 室 伊 作	同 上 委 員
矢 崎 和 子	同 上 委 員
北 原 勝	同 上 委 員
小木曾 英 寿	上郷町文化財保護委員会委員長
牧 野 光 彌	同 上 副委員長
麦 島 正 吉	同 上 委 員
稲 垣 隆	同 上 委 員
菊 本 正 義	同 上 委 員
岡 田 道 人	上郷町教育委員会委員長 (昭和60・9・30まで)
関 島 昌 平	同 上 教育長 (昭和60・9・30まで)

2. 調 査 団

団 長 佐 藤 甞 信	日本考古学協会会員
調査員 牧 内 住 子	長野県考古学会会員

3. 指 導

長野県教育委員会事務局 文化課

4. 事 務 局

吉 川 昭 文 (教育長)	篠 田 公 平 (教育委員会事務局長)
北 原 克 司 (産業課長)	吉 川 勝 一 (社会教育主事・係長)
中 園 紘 (耕地係長)	大 蔵 豊 (公民館主事)
林 恵津子 (社会教育係・主任)	鈴 木 幹 夫 (耕地係・主任)

5. 発掘作業従事者

福 島 明 夫	松 下 真 幸	土 屋 ミチ子	下 平 幸 江
細 田 七 郎	高 橋 寛 治	宮 島 平 三	木 下 当 一
清 水 五 郎	平 沢 今朝光	武 藤 弘	木 下 伝 治
小 池 伸 二	平 沢 秀 雄	下 平 米 一	岡 島 定 治
菊 本 正 義			

6. 遺物整理・製図等

佐 藤 いなゑ	田 口 さなゑ
---------	---------

後 記

上郷町黒田の大明神原地域における土地改良総合整備事業の実施の土地の大部分は、周知の埋蔵文化財包蔵地大明神原遺跡を包含しており、古くから土器・石器が表土に現われていたなどによりよく知られた遺跡であります。

当該地における土地総事業の実施は数年間に及ぶ計画で、年次毎主管の産業課との連絡をとりあい、さらに専門家の意見を聴しつつ埋蔵文化財保護の立場にたって協議してきたところです。

今年度発掘調査は第2次で記録保存をはかることにしたものです。調査団長には昭和59年度第1次発掘調査に引き続き考古学者の佐藤甦信先生をお願いしました。献身的な御努力をいただき、優れた成果を得たことは、地域の歴史に又新しい頁を加えることになり、まことによろこばしいことです。

この間当該地の調査活動において土地所有者をはじめ多くの地域の方々のご協力があったことに対し深く感謝申し上げます。

又調査全般にわたり調査団長佐藤先生はじめ調査員、作業に従事された皆様のご尽力に対し心からお礼申し上げます。

今回調査による記録保存は、後の学術資料として重要な意義をもつものと確信します。さらに引き続き次年度の調査にも限りない期待があり、順調に進むことを願ってやみません。

昭和61年3月

上郷町教育委員会

黒田大明神原Ⅱ

第二次発掘調査報告書
付 正命庵跡発掘調査報告

1986.3

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印刷 株式会社 秀文社
